

## ヘブル人への手紙1章1-3節 「語られる神」

### 1A 被造物

1B 永遠の創造主

2B 物言わぬ偶像

### 2A 預言者たち 1

1B 多くの部分

1C アダムからノア

2C アブラハム(約束)

3C モーセ(律法)

4C ダビデ(神殿礼拝)

5C エズラ(律法朗読)

2B 多くの方法

1C 主の声

2C 夢や幻

3C 御使い

4C 内なる声

5C 主の導き

### 3A 御子による語りかけ 2-3

1B 終わりの時

1C 律法と預言者の成就

2C 来臨による完成

2B 万物の相続者

1C 創造

2C 神の栄光と本質

3C 罪のきよめ

## 本文

ヘブル人への手紙を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、ついにヘブル人への手紙に入ります。これまでは、パウロが異邦人を中心とする教会に宛てた手紙ですが、この手紙は、その名の通り、ユダヤ人に宛てた手紙です。すでに聖書を知り、神を礼拝していた人々が、イエスを自分たちのメシアとして信じた人々に宛てたものです。

今朝は、1章1-3節に注目します。「<sup>1</sup>神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました、<sup>2</sup>この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。神

は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。<sup>3</sup> 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」著者は、この手紙を、神が語りかけたというところから始めます。神がいろいろな方法で、預言者たちによって語られたが、今は、御子によって語っておられることを話しています。

## 1A 被造物

私たち日本人にとって、キリスト者として信仰を持って生きる時に、大きな変化を遂げているのではないかと思います。それは、漠然と神はいるのではないかとはいっていますし、祈ることさえするのですが、果たして誰に祈っているのか、分からないのです。ましてや、人格をもって神が、自分に語りかけることなど、まず考えたこともないと思います。

## 1B 永遠の創造主

しかし、生ける神に立ち変えると、聞こえてくるものがあります。それは、創造主からの声です。この方が造られた物を通して、私たちに語ってくださることです。詩篇 19 篇を読みます。

1 天は神の栄光を語り告げ大空は御手のわざを告げ知らせる。2 昼は昼へ話を伝え夜は夜へ知識を示す。3 話しもせず語りもせずその声も聞こえない。4 しかしその光芒は全地にそのことばは世界の果てまで届いた。神は天に太陽のために幕屋を設けられた。5 花婿のように太陽は部屋から出て勇士のように走路を喜び走る。6 天の果てからそれは昇り天の果てまでそれは巡る。その熱から隠れ得るものは何もない。

私が思い出すのは、妻といっしょにしばしば旅行に行く時のことです。そこは、いわゆる日本昔話に出てきそうな、のどかな昔ながらの田舎の風景です。稲作の刈り取りが終わった後の田んぼを歩きますと、山が見えます。その山を見る時に、ふと、二つの見方をしている自分がいたのです。それは、かつての自分、つまり山そのものに対して、それが神であるかのようにして、お祈りする自分です。実は、何も反応がありません。しかし、新しい自分は違います。その美しい山を見て、神が山を造られたと知ることです。すると、声が聞こえます。主の栄光の声が聞こえます。そして、祈りを献げることができるのです。

## 2B 物言わぬ偶像

神が目に見えないので、それは信じるに値しないと、多くの人が考えています。そして、目に見えるものだけを信じます。けれども、目に見えるものだけ信じる時に、人は聞こえる者が聞こえなくなります。見えるものが見えなくなります。それは、目に見えるものには、それ自体には見ることも、聞くことも、語ることもできないからです。詩篇 115 篇 2 節から読みます。

2 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。3 私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。4 彼らの偶像は銀や金。人の手のわざにすぎない。5 口があっても語れず目があっても見えない。6 耳があっても聞こえず鼻があっても嗅げない。7 手があってもさわれず足があっても歩けない。喉があっても声をたてることができない。8 これを造る者も信頼する者もみなこれと同じ。

私たちの神は、目に見えませんが、確かに私たちを見ることができます。そして、私たちの祈りを聞くことができます。そして、私たちに語りかけることができます。けれども、目に見えるもの、偶像は、目があっても見えず、耳があっても聞こえず、口があっても語れないのです。

## 2A 預言者たち 1

ですから、私たちは被造物を通して、神が語ってくださるのを知ります。これは大きな恵みです。けれども、それだけではないのです。それが、この一節にある預言者です。「**神は昔、預言者たちによって**」とありますね。預言者たちは、神からのことばを預かっています。それを語ったことが書き記されているのが、私たちが手にしている聖書です。被造物でも神は語られますが、預言者の言葉は、一気に神が自分に人格的に語られるのを知ることができるのです。

このことは、すごいです。物言わぬ偶像のところにはしか連れてこなれなかった私たちが、日々、語りかける神を知ることができたのですから。パウロは、「ユダヤ人のすぐれている点は何ですか？・・あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました。」と言っています(ロマ 3:2)。そして、イザヤの預言でエルサレムは、「幻の谷」と呼ばれています(22:1)。それは、それだけ数多くのことを神がエルサレムに対して語ってくださっているので、まるで幻のように、あざやかに神の言われていることが見えてくる、という意味です。

ですから、私たちは、この方のことばを聞かないわけにはいきません。先ほど読みました、太陽の動きで主が語りかけていると歌っていた、詩篇 19 篇ですが、続きを読みますと、主のみことばの慕わしさを歌っています。

19:7-10 【主】のおしえは完全でたましいを生き返らせ【主】の証しは確かで浅はかな者を賢くする。8 【主】の戒めは真っ直ぐで人の心を喜ばせ【主】の仰せは清らかで人の目を明るくする。9 【主】からの恐れはきよくとこしえまでも変わらない。【主】のさばきはまことでありことごとく正しい。10 それらは金よりも多くの純金よりも慕わしく蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。

たましいを生き返らせ、賢くして、心を喜ばし、目を明るくするなど、すばらしいですね。みことばを持っていること、それを聞いて、行うことはなんと幸いなことでしょうか。

## 1B 多くの部分

ですから、被造物で語られることもすばらしいですが、預言者による神の語りかけは、私たちを生き返させます。そして次に、主は長い期間をかけて、語ってくださいました。「**多くの部分に分け**」て、語られたと言っています。時代ごとに、主は、徐々に、少しずつ、積み上げて行くように語ってくださいました。

## 1C アダムからノア

まず、アダムからノアです。主は、アダムに語られ、そして女の子孫、メシアが来ることを教えられました。そして、ノアの時代に洪水によって地を滅ぼし、ノアの家族によって全地に満ちるように命じられます。

## 2C アブラハム(約束)

それから、時代は一気に、一個人に神はしぼられます。アブラハムです。彼の子孫は大きく強くなり、彼の子孫によって世界の民が祝福されるという約束です。また、カナン之地を与えられました。そして約束は、アブラハム、イサク、ヤコブへと受け継がれます。

## 3C モーセ(律法)

次に、時代はモーセに移ります。エジプトから神がイスラエル人を救い出し、彼らをご自分の民にする契約を結ばれました。その時に律法を与えられました。アブラハムに対しては、主は大まかな約束しか与えられませんでした。モーセに対しては、生活の細部に至る命令を与えられて、国民生活ができるようにしてくださっています。

## 4C ダビデ(神殿礼拝)

そしてダビデの時代に入ります。モーセの後継者ヨシュアが約束の地に入ってから、彼らは主に背きました。けれども、主はサムエルを起こして下さり、霊的に復興します。けれども彼らは王を求めます。主は、ご自身が選ばれたダビデを王とされます。

そこで、主はダビデによって、神の王国の幻を示されました。ダビデの世継ぎの子キリストが、神の国を受け継ぎます。ダビデは、礼拝することに情熱を傾けました。礼拝こそが神が王であることを示しています。そして、礼拝するなかで、ダビデはイスラエルを治めました。礼拝王国といったらよいでしょうか。

## 5C エズラ(律法朗読)

そして王たちの時代を経て、バビロンに彼らが捕え移されてから、彼らはエルサレムに帰還します。そして、神殿を再建します。そこで強調されたのは、律法の朗読です。主に背いたことを悔いた彼らは、律法に立ち上がって、それを守り行うことに熱心になっていきます。けれども、それが形

骸化して、人の言い伝えや教えに熱心になってしまっていたところに、イエス様が現れるわけです。

## 2B 多くの方法

このようにして、主は徐々に、段階を経て、ご自分の計画を明らかにされました。そして次に、「**多くの方法**で」語られたとあります。みなさんも、主の語られることを聞く、ってどういうことか？と思われるかもしれません。

## 1C 主の声

まず、初めに思い浮かぶのは、物理的に主の声がするということです。モーセがその筆頭でしょう。主がシナイ山に降りて来られて、十戒を与えられました。彼らはその声を聞き、恐ろしくなり、モーセに代わって聞いてほしいとお願いしたほどです。

## 2C 夢や幻

そして主は、夢や幻の中で語られることが多いですね。ヤコブは、天のはしごの夢を見ました。ヨセフは、畑の束が、自分の束におじぎをしたという夢を見ました。そして、夢が眠っている時に見るものであるのに対して、幻は起きている時に見るものです。イザヤやエゼキエル、数多くの預言者が幻を見て、語っています。

## 3C 御使い

御使いが語ることも、多々ありました。例えば、ギデオンの前に御使いが現れ、彼の用意した食べ物に火によって一気に呑み尽くしました。それで、彼が主からの使いであることを知りました。

## 4C 内なる声

そして、内なる声、ささやかな声があります。エリヤが、イゼベルを恐れて、シナイ山まで長旅をしました。そして、大風が吹きましたが、主がそこにおられませんでした。風が吹いてもそこにおられませんでした。地震があり、また火がふってもおられませんでした。そして、「かすかな細い声」がしたのです（I 列王 19:12）。

## 5C 主の導き

そして、かすかな細い声ですらない、状況を通して主が語られることがあります。ヨセフが、そうでしょう。彼が兄たちに奴隷として売られましたが、それは神が自分を初めに、エジプトに遣わすためであったと気づきます。飢饉が起こって、ヤコブの家族がエジプトに下って、救われることが分かったからです。主が、事を行われて、そこから語りかけられることがあります。

## 3A 御子による語りかけ 2-3

こうして主が、預言者を通して、先祖たちに語られたのですが、今は、御子にあつて語られている

と言います。「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。」これまで、預言者によって語られていたのですが、神のことばが、御子にあって私たちに伝わっているのです。神が語られる時に、御子を知ることによって語りかけを受ける、ということです。ヨハネが福音書で言いましたね、「ヨハ 1:1-2 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」

## 1B 終わりの時

「**終わりの時**」と言っています。これは、つまり、神のご計画が完成されようとしている、ということです。主がすべてを完了されようとしていることです。御子が来られたことによって、終わりの時はすでに始まっているのです。この方を知ることによって、すべてを知ったと言ってよいのです。

## 1C 律法と預言者の成就

イエス様は、「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」と言われました。主イエスこそが、これまで預言者が語って来たこと、モーセによって与えられた律法が成就するのです。この方において、すべての神の語られたことが凝縮されているのです。

## 2C 来臨による完成

そして今、主は天におられて、再び戻って来られます。このことによって終わりが来るのです。「黙 1:7-8 見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。神である主、今おられ、昔おられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」」アルファでありオメガとは、ギリシア語のアルファベットの最初から最後までです。したがって、イエス様が来られることによって、すべてのすべてが現れて、この方だけになるということです。

ですから、私たちはイエス様を知る時に、神に究極の語りかけを受けるといことです。イエスという言語といたらよいでしょうか。主ご自身の人格に、霊によって触れるといことです。

## 2B 万物の相続者

### 1C 創造

それで、「**神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。**」御子と呼ばれているように、この方は王なる神の世継ぎの子です。神が万物の創造主であられますから、御子は万物を相続されるのです。ゆえに、御子によって世界が造られました。ちなみに、ここの「世界」は、「諸々の時代」と訳せるかもしれません。物質だけではなく、時空間をすべて造られた、といことです。

## 2C 神の栄光と本質

そして、「<sup>3</sup>御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」と言っています。栄光の輝きですが、幕屋において、至聖所に入ると、そこには契約の箱とその上に置いてある、宥めの蓋があります。主がそこにおられて、宥めの蓋に彫られているケルビムの間から語られる、と言われます。そこは、燭台からのともし火は必要としていません。主ご自身が栄光で輝いておられるからです。主は、高い山でご自分の姿が変わり、クリーニング屋さんでもできないような、白い輝きを放っていました。そして主が、黙示録でヨハネに現れた時に、光り輝いていました。

そして、「**神の本質の完全な現れ**」であります。主イエスを知るということは、神ご自身を知ることです。ピリポが、神を見せてくださいと願った時に、イエス様は、「わたしを見た者は、父を見たのです。」と言われました。ここで、多くの日本人の方が聞かれる質問に答えられると思います。「神は信じられるが、イエスを信じるとなると、まだその気ではない。」です。神は御子をご自身を完全に現わす者として選ばれたのです。ですから、この方によって、神が本当の意味で分かります。

## 3C 罪のきよめ

そして、創造の働きをされて、今も万物をみことばによって保っておられておられます。そして、「**御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。**」とあります。これがヘブル人への手紙のテーマです。王なる神の御子であり、この方は王子です。神の右の座に着かれていますのですが、その前に、ユダヤ人にとっては大祭司のすること、すなわち「**罪のきよめ**」を成し遂げられます。大祭司は年に一度、至聖所に入って、宥めの蓋の前で血をふりかけて、イスラエルの罪を清めます。それを、万物を造られた方が、キリストにあつて全人類の罪のために、ご自身が流された血を携えて、清めを成し遂げました。

私たちが、主の流された血にあずかる、聖餐式に出る時に、主イエスがおられることを知り、それで神の語りかけを受けるのではないのでしょうか？主がおられるということが、すでに語りかけなのです。私たちは、人にいっしょにいるということが、大きな語りかけになっているでしょう。いろいろなことを説教して、こうすればいい、ああすればいいとか言っているのではなく、ただ一緒にいることが、語られているのでしょう。主は、流された血をもって、また裂かれたパンをもって、私たちと共にいてくださいます。

これからずっと、御子について見て行きます。この方がいかにすぐれているかを、著者は延々と述べます。それは、他にいろいろなものがあるけれども、それ自体は悪い者ではなく、良いものですが、すべては主にまさるものではないのです。すべては、イエス様なのです！ユダヤ人は、神からいろいろな良いものを任されていました。神殿もあり、律法もあり、礼拝があり、御使いなど、いろいろありました。しかし、すべてイエス様なのです！“

カルバリーチャペルの牧者の中で、よくいう言葉があります。It's all about Jesus! すべては、イエス様についてなのだ、という訳になります。いろんなことが、人生には、生活には、そして教会にさえあるけれども、すべてはイエス様だよ！ということです。この方を、何ものにもまして聖なる方とする、あがめる時に私たちは、神からの全き語りかけを受けるでしょう。